中日新聞（2025年1月16日付）
掲載記事は中日新聞社の許諾を得て転載しています。

「まだ30年」神戸で涙する人も

日福大学長補佐・野尻さん 被災の大震災語る

1995年1月17日に起きた阪神淡路大震災。日本福祉大（美浜町）の学長補佐、野尻紀恵さん(60)は当時、神戸市の女子高校に勤め、住まいは兵庫県明石市にあった。現在は大学の減災連携・支援機構長も務める野尻さんが30年を振り返った。（石井豪）

「愛知にいよいよ大きいのが来たんじゃないか」

午前5時46分、発生直後の心境を明かす。当時から東海地方は地震が危ないと言われていたが、関西には危機感がほぼなかった。住んでいたのは高層マンションの19階。「めっちゃ揺れた」ものの、震源が目の前とは夢にも思わなかったという。

ただ、44年の昭和東南海地震を経験した母から震災の恐ろしさをかねて伝え聞いており、寝室に何も置かないことは心がけていた。おかげで、けがはなかった。他の部屋はひどい散らかりようだった。マンションからは隣の神戸市内で多数の煙が上がっているのが見えた。

勤務校のある同市長田区は住宅密集地で火災が起きるなど、大きな被害に見舞われた。学校は指定避難所ではなかったが、続々と避難者が流れ込んだ。

野尻さんは担任をするクラス全員の生存をなんとか確かめたが、学校全体では3人の生徒が犠牲になった。たんすの下敷きで亡くなった生徒は、野尻さんもよく知る1年生だった。

阪神淡路大震災を振り返る野尻さん
＝美浜町の日本福祉大で

一方、間一髪で助かった命もあった。数日前、学校では火災の避難訓練をしていた。流れた防災ビデオは地震にも触れ、大きな揺れの場合には小さな部屋に逃げ込むよう伝えていた。

そのビデオを見ていた生徒が実際にトイレに飛び込み、家は全壊したが一命を取り留めた。「体が動いた」と語っていたといい、野尻さんが防災啓発や訓練の重要性を認識するきっかけとなった。

1カ月後、登校できる生徒は昼まで自主学習をすることになったが、野尻さんはある光景に目を見張る。生徒らが、避難している高齢者の話し相手になったり、子どもと遊んだり、水くみも手伝ったりしていた。自身も大変な思いをしているはずの生徒の献身的な姿に「本当にびっくりした。頭が下がる」と振り返る。

教え子の高校生 防災ビデオが救った命／自らボランティア

4月上旬に避難者は学校から退去したが、生徒たちの思いは消えず、ボランティア部が立ち上がった。部員は何十人にも上り、各ボランティア団体と協働し、仮設住宅の入居者に困り事を聞いて回るなど、精力的に活動した。

野尻さんは現在も定期的に現地を訪れている。「復興住宅は残り、今も涙を流す人がいる。長田に戻ると、まだ30年しかたっていないと感じる」。30年の思いを胸に、減災連携・支援機構では、震災の被害をできる限り小さくするための活動に取り組んでいる。

（許諾番号:20250117-31839）